

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

本年年初に展望では、2018年の世界経済環境に関しては2017年の延長線上にあり、大きく変化する要因は見当たらず、通貨の強さも2017年の構図をおおむね引き継ぎ、ドル/円に関してはレンジ内で安定的に推移する可能性が高いと考えてきました。

堅調な米景気、FRBの利上げ観測の継続はドルを下支えし、緩やかなドルの上昇が期待できるため、大幅なドル下落のリスクは低いように考えられるものの、2017年12月のFOMCで発表されたドットチャートによると2018年は3回の利上げが予想であり、その点から考えると米国の長期金利の上昇幅は限られたものとなる可能性が高く、ドルの上値も限りがありそうで、昨年の高値水準が上値目標としてきました。

しかし、1月の相場は、年初に113円台の高値を付けて以降、ドルはじり安となり1月後半には108円前半まで値を下げました。

さらに2月に入ると、トランプ米大統領が洗濯機と太陽光パネルに対してセーフガード（緊急輸入制限）を発動することに署名し、貿易摩擦に対する懸念が拡大したことやムニューシン米財務長官が「弱いドルは貿易面で米国の利益になる」と発言したことなどをきっかけにドル安の流れが強まり、さらに米金利の急上昇と米株の急落を背景としたリスク回避姿勢の強まりから円買いが強まり、下値めどとしてきた昨年安値107円水準を下回り104円台にまで突入しました。

ドル/円相場のトレード戦略

しかし、その後は良好な米国経済を背景にドルの買い戻しが進み 110 円台を回復する動きとなっています。

6月のFOMCでは本年4回の利上げ期待を高める内容となっており、また初の米朝首脳会談を無事こなしたことでアジアの地政学リスクも低下しており、ドル/円は底堅い動きが予想されます。もともと、米国を中心とした貿易摩擦の激化はドルの上昇抑制要因であり、この点を考慮すると年後半もレンジ相場が継続するという見方を大幅に変更する必要はないものと考えられます。

■短期展望

先週は、111円を挟んだ揉み合いの動きが継続しました。

米国とカナダ・中国との通商問題に対する警戒感から111円を割れる動きがあったものの、米ISM製造業景気指数が14年ぶりの高水準となったことから111円台半ばまで反発、一時111円76銭の週高値を付けました。

週末には米雇用統計が予想を上回りドルが買われたものの、その後にトランプ大統領が中国に2670億ドルの追加関税を賦課すると発言したとの報道が伝わり一時110円74銭まで反落し、111円超水準で週を越えています。

今週も、先週同様に110円～112円での揉み合い相場が継続しそうです。

貿易問題に関して、中国や欧州に加え日本に対してもトランプ政権からの牽制発言が見られ、ドルの上値の抑える動きが続くでしょう。

しかし、先週の米雇用統計で示された通り、米国の景気は堅調であり、年内二回の利上げはほぼ織り込まれてきており、円高トレンドが形成される可能性は非常に低いものと考えられます。